

DEBUT 首長

滋賀県彦根市長 大久保 貴氏



おおくぼ・たかし 1963年生まれ。88年8月、米国ミシガン大学社会学部を卒業。91年4月から滋賀県議会議員を2期。2009年4月から障害者支援施設所長を務める。01年、05年、09年の彦根市長選に落選し、4回目の挑戦となる13年4月に当選を果たす。49歳。

湖北振興へリーダーシップ VB呼び込み新産業を創造

彦根市 滋賀県北東部における商工業の中心地で、仏壇やバルブなどの地場産業も根付いている。人口は約11万2000人。マスコットキャラクター「ひこにゃん」の知名度も高い。

——彦根という都市を、どんな街にしたいのか？

滋賀県内では様々な分野で“南高北低”が進んでいる。湖北の振興はなかなか難しいが、活性化に向けて彦根の役割は大きいと思うし、リーダーシップを果たしたいと思う。そのためには強い彦根を作りたいと考えている。魅力があり、都市間競争に勝ち抜いていける力をつけるといった意味だ。

例えば観光の分野。国宝の彦根城を中心とする文化的な遺産があり、誘客の面でも彦根が積極的に取り組んでいる。これを湖東・湖北の圏域で誘客を図る動きにつなげたい。また県に対しては、世界遺産の登録を目指すことの重大性を認識してもらい、ともに取り組めるよう働き掛けていく。

そのためには、役所の機能を

強化していく。行政のプロとしての職業集団が能力を120%発揮できる舞台装置を作っていききたい。

——観光以外の分野では、どのような地域振興策をどう描いているか。

地域経済の振興は避けられない課題なので、新たな産業政策を早急にまとめたい。経済活性化委員会を設置して、生産だけでなく消費を含め、付加価値ができるような産業構造ができないか検討していきたい。

例えば遊休地の活用には民間活力を使いたい。環境や福祉分野はリターンは少ないかもしれないが、退職後のセカンドライフの過ごし方を提案することでビジネスになる可能性がある。また湖岸沿いに民間の道の駅を誘致して地元産品や加工品を販売したり、近隣にスポーツ施設を設置して相乗効果を引き出すことも考えられる。

市街地で増えている空きオフィスも、新ビジネス創造のチャンスと考えたい。こうした場所にベンチャー企業を呼び込み新産業を創造できないか検討する。

彦根には大学が3つあり、人材の宝庫とも言えるからだ。マーケティング、情報分析、統計処理などの業態なら地方でも操業できると思う。どんな工夫をすれば、核となる企業が生まれるか考えたい。

——また一方で、「全国一の福祉モデル都市に」という都市目標も掲げている。

彦根市の30年後の人口予測は11万人を少し切る程度で、大幅な減少はなさそうだ。ただ人口の高齢化は確実に進むので、福祉政策は不可欠だ。

ただ目指すのは個別の福祉サービスを積み上げたり、特定の福祉政策が抜きん出ている都市ではない。目標は、総合的に見て市民がこの街に住んで良かったと思う状態にすることだ。多様な市民ニーズに向き合えるよう、市職員が問題意識を共有していく。時間はかかると思うが、市民が安心できる福祉の形が見えてくるだろう。

(大津支局長 蓮田 善郎)